2011 年度自然遊学館わくわくクラブ活動報告

白木 江都子（貝塚市立自然遊学館）・白木 茂（自然遊学館わくわくクラブ）

自然遊学館わくわくクラブは、自然遊学館と協働で自然環境活動を展開するボランティア団体です。貝塚市二色、都市公園市民の森内にある自然生態園の維持管理を中心に、身近な自然の復元を目ざして、生きもの調査・自然観察会・情報の発信・次世代の育成などに取り組んでいます。ハッサク山は毎月第 1 火曜日を、自然生態園は毎月第 2 土曜日を、2 年目に入った岸和田市河合町フィールドは毎月第 4 日曜日を、それぞれ定例作業日としています。

●自然生態園作業

2011 年４月９日　参加者 30 人

午前中、岩崎・森本・石井翔生愛のメンバーでトンボの池生きもの調査を 15 分間、トンボの池の掲示板も張り替えた。午後からは 2011 年度総会と、自然遊学館高橋寛幸新館長の歓迎会を行った。

●「高槻ジャズスト」で連凧を揚げるための講習会

2011 年４月 24 日　参加者７人

今年も高槻ジャズストに参加することに決めたが、東北震災被災地復興支援の為の連凧を揚げようということになり、小川信夫さんのご自宅に連凧名人の谷佐代子さんをお招きし、連凧作りを習い、完成した連凧を持って近所の公園に出向き、揚げ方も教えていただいた。

●「高槻ジャズスト」参加

2011 年５月３日～４日　参加者 20 人×2 日

1 日目、ジャズスト会場のテントブースの中に連凧作成場所を作り、材料を揃えた。参加者の方々から¥100 の材料費をいただいて和紙に好きな絵を描いてもらい、クラブ員が指導しながら凧を組立て、足を付け、1 日で 50 枚くらい完成した。1 日目の終了間際に連凧を揚げるはずだったが、雨が降り出したため、凧揚げは中止し明日に備えた。
2 日目は好天に恵まれて参加者も多く、2 日間で完成した凧を、テント周囲に張りめぐらしたロープに、結びつけたので、カラフルな凧がヒラヒラ風に泳いで華やいだ。もうすぐ揚げるというときにタイミングよく谷先生が来てくださり、手早く連ねてくださり、すぐさま橋の上から揚げることができた。佐藤さんの賑やかなマイクの声に励まされて、空高く 113 枚の連凧が揚がり、会場は歓声と感動に包まれた。

●全国トンボ市民サミット薩摩川内市
2011 年５月 14 日～15 日　参加者５人

鹿児島県薩摩川内市藺牟田池（標高 300m）の畔に立つ公営宿舎「湖畔リゾートホテルいむた」で、地元の皆さんのあたたかいおもてなしを受けた。火口湖の藺牟田池は周囲 3.3km、ラムサール条約の登録湿地に、環境省レッドデータブック絶滅危惧Ⅰ類指定のベッコウトンボが生息している。昨年、記録的な旱魃に見舞われたためか、個体数は少なかったが、枯草などに長く静止してくれるので、カメラにおさめることができた。

●自然生態園作業
2011 年５月 14 日　生きもの調べ　参加者４人

全国トンボ市民サミットへの参加と重なったため、少人数になったが、いつも通り生きもの調査を実施した。作業後、自然遊学館玄関に生えている柑橘類に産み付けられたアゲハチョウの卵探しを楽しんだ。

●自然生態園作業
2011 年６月 11 日　トンボの池さらえ　中止　参加者 12 人

雨のためトンボの池さらえを中止し、生きもの調べのみをいつも通り実施した。その後、「岸和田市河合町マイフィールド、今後の方向性」についてミーティングを行った。

●カエル探偵団関西総会に参加
2011 年６月 12 日　参加者６人

高槻市芥川緑地資料館でカエル探偵団関西総会が開催されることになり、お誘いを受けて参加した。雨の中、合羽を着込んで高槻市塚脇の三好山周辺へ、カエル探検に出向いた。モリアオガエルとその卵塊、卵や孵化したオタマジャクシを狙うイモリを興味深く観察した。田植えの遅い田んぼの周辺で、トノサマガエル・ツチガエル・ヌマガエル・ニホンアマガエルに出会った。帰館後は大阪市立自然史博物館の和田学芸員から高槻のカエルのお話を伺い、カエル探偵団長福山欣司（慶応大学生物学教室）さんから、探偵団の活動を伺った。

●岩手県大槌町　東北震災被災地復興を願う連凧揚げ
2011 年６月 16 日～20 日　参加者３人

自然遊学館わくわくクラブ員と高槻ジャズスト参加者で作った連凧 108 枚を、わくわくクラブ会員 3 名で東北震災被災地の岩手県大槌町に持って行き、地元の子どもたちと一緒に大槌町の空に揚げた。「一歩ずつ希望を持って」などの文字が風に乗って鮮やかに大空に舞い、復興を心から願った。

●自然生態園作業
2011 年７月８日　参加者 11 人

朝からとても暑く、トンボの池生きもの調査で採集した生きものは、自然遊学館多目的室内で同定やカウントを行った。草刈りは、草刈り機が活躍したが、細やかな部分はやはり手刈りが必要だ。

●シンポジウム「小さな自然再生」参加
2011 年７月 18 日　参加者５人

兵庫県立人と自然の博物館大セミナー室で、「小さな自然再生」の 6 例を拝聴した。小さな自然再生どころか、大掛かりすぎる、と思うものもあったが、どれも面白い試みで勉強になった。ザリガニが流れに逆らって遡上する性質を利用して捕獲する「ザリガニホイホイ」は、アレンジして自然生態園も使ってみたいものだ。

●養蜂場見学
2011 年８月４日　参加者５人

メンバーの中にニホンミツバチの養蜂をしたいという人が数人いるので、知人に紹介してもらって泉佐野市上之郷の養蜂家を訪ねた。いろいろな形の巣箱が設置されているのを拝見した後、採蜜の作業も見せていただいた。養蜂の天敵「スムシ（蛾の幼虫？）」を栄養価の高い餌として、放し飼いのニワトリに与えておられたのは興味深い光景だった。

●自然生態園作業
20011 年８月８日　参加者 17 人

太成学院大学付属中学校の生徒 8 人と先生 2 人が生きもの調べに参加を希望されたので、自然遊学館の岩崎さん指導のもと、森本静子さんと喜多理恵さんが手伝った。午前中に山口会長ご夫妻が海辺の植物ブロックの草刈りをして下さったそうで、午後からはドングリの山の草刈りをした。

●和歌山県海南市孟子ビオトープ見学会
2011 年８月 25 日　参加者 14 人

車を停めた場所からビオトープへ向かう途中にあって日頃から維持管理されている池を見学した。カエデドコロの花が満開、スズサイコの実やワレモコウのある風景はいいものだ。クサギの花にはモンキアゲハが訪れ、ハグロトンボの黒い羽が青光りしていた。帰途は仲里長浩さんが実験しながら耕作しておられる稲田を案内してもらったが、早生種から晩生種まで多くの品種を横並ぶに植えておられて、違いがよくわかった。

●自然生態園作業
2011 年９月 10 日　参加者 16 人

トンボの池生きもの調べとバッタの原っぱバッタ調べ
14:00～16:00 トンボの池の生きもの調べと自然生態園維持管理作業
前日から仕掛けたザリガニもんどり 6 個に、ザリガニが 56 匹入っていた。
16:00～17:30 バッタの原っぱバッタ調べ：11 種 70 匹のバッタ目昆虫を確認した。
19:00～20:30 鳴く虫観察会：10 種の鳴き声を聞いた。

●自然生態園作業
2011 年 10 月８日　参加者８人

午前中はトンボの池の生きもの調べをし、調査後は池周辺の草刈りや池中のアンペライを間引きし、新ザリガニ捕獲装置を設置してみた。海辺の植物ブロックは、ハマゴウを間引き、大きい太い根を掘りだして整理し、また公園から侵入しているコウライシバは、鍬などを使ってはがした。

●花博協会助成金事業成果発表会に参加、助成成果発表
2011 年 11 月３日　参加者４人

早朝に岸和田を出発し、運転を交替しながらひたすら高速道を走り続け富山市内富山電気ビルディングに向かった。予定通り発表会開始前に余裕を持って到着し、プログラム 5 番目「生きもの生息環境調査と環境学習リーダーの育成」という題名で白木江都子が発表した。主催者の希望通り交流会にも参加し、19:00 前に出発して、またひたすら高速道を走って日付が変わる頃に帰阪した。

●自然生態園作業
2011 年 11 月 12 日　参加者 13 人

トンボの池生きもの調べを手伝いながら、海辺の植物ブロックでは先月に引き続き、本来の海浜植物コウボウシバやコウボウムギなどが増えるように、公園から侵入したコウライシバを抜き取り、増えすぎているススキを刈りとった。子どもたちはドングリの森でドングリ拾いを楽しんでいた。

●大阪自然史博フェスティバル準備作業
2011 年 11 月 18 日　参加者４人

長居公園の近くに住む会員の高野ひとみさんと、17:00 に自然史博物館で落ち合い、定められたブースの展示準備をした。

●大阪自然史博フェスティバル
2011 年 11 月 19 日～20 日　参加者 23 人

クラブ員は、19 日と 20 日、それぞれ午前と午後に分けて、ブースに張り付いた。展示していたドングリの森のドングリは、名前を聞かれることが多いのだけれど、アベマキとクヌギの違いなどがわかりづらく返答に困った。バッタの原っぱのバッタとトンボの池のアメリカザリガニの生体展示は人気で、参加者との会話がはずんだ。19 日は雨で参加者は少なかったけれど熱心な人が多く、20 日はお天気が回復して参加者は多く、賑わった。

●たわわの小池／池さらえ
2011 年 11 月 23 日　参加者 15 人

10 時に集合し、まずは山口会長の挨拶、続いて講師の岩崎拓さん・西澤真樹子さんを紹介し、15 分間の生きもの採集を始めた。採集後、山口会長が樋の栓を抜く作業にかかられたが難航し、天満和久さんが会長を助けて奮闘した。水が抜け始めると採集物の仕分け班と池周辺の草刈り班に分かれて作業を再開、草刈り班は、水辺や道路脇を刈り払い機と手刈りで進めた。昨年、きれいな花を咲かせ、細いけれど美味しいレンコンを食べることができたハスが跡形もなく消えてしまっていて、とても残念。生きもの調査では、生きものの種数も個体数も激減していて、アメリカザリガニだけが、大きなものから小さなものまでいっぱいいた。池の水が少なくなった頃に、よく肥えたカワムツが 30 匹ぐらい暴れていてびっくり、捕まえて川に逃がした。雨混じりのあいにくの天候だったが、それほど強い雨にはならず、刈った草を燃やし、池もその周辺も、手入れの行き届いたいい里山風景になった。

●豊岡コウノトリの郷と周辺田んぼ見学会

2011 年 12 月 10 日　参加者 19 人

8:50 貝塚市役所出発、出石川に遊ぶ原風景のコウノトリの姿を求めて、バスの窓から目を凝らしたが、見つけられないままに 12:10、コウノトリ郷公園に着く。子どもたちは早速田んぼビオトープに入らせてもらい、最初は泥田に足を取られて動きもままにならなったが、少し経つとあちらでもこちらでも獲物を捕まえてきた。この日の水生動物は、メダカ・ドジョウ・クロゲンゴロウ・マルガタゲンゴロウ・マメゲンゴロウ・オオコオイムシ・ギンヤンマ・イトトンボの仲間・シオカラトンボ・カワトンボヤゴ・カゲロウの仲間・コミズムシなどで、兵庫県立総合高校の上田尚志先生に同定や解説をしていただいた。アキアカネの成虫も飛んでいた。
ビオトープでは、早春にニホンアカガエルが卵を産み、オタマジャクシが孵るとゲンゴロウなどの水生昆虫がやってきてそれを食べるそうだ。館内に入って、コウノトリ米のおにぎりとお味噌汁の昼食をいただき、講座室に移り、豊岡市コウノトリ共生課の宮垣さんが、映写機を使ってコウノトリを様々な角度から説明して下さった。控えめで、さりげなく、けれど熱意と知識がいっぱいの公務員宮垣さんに感動。その後案内していただいた冬期湛水田でも、宮垣さんの説明は具体的でわかりやすく、またコウノトリをめぐる自然や地元や市役所の熱い思いに打たれた。昔は豊岡にはジル田（湿田）が多く、農作業には田舟が必要だったほど、コウノトリの楽園だったのに、圃場整備で乾田化し、水路と水田が乖離した上に、農薬使用が追い打ちをかけ日本のコウノトリは絶滅してしまった。今は、ビオトープ水田が 12 ㌶あり、小学校区ごとに 1 ㌶のビオトープを目指しておられ、このビオトープでの小学校環境学習は 30 校中 15 校が利用している。また冬期湛水田は 100 ㌶あり、6 月中旬でも田の水抜きはしない。田んぼと水路の間の魚道は合計 110 本もあり、3 日間で 500 匹の魚が遡ったこともある、など羨ましいお話をたくさん伺った。田んぼ学習の生きもの調査を続けるうちに、冬期湛水とは言え、単純に水を張るのがいいわけではなく、50 ㎝ぐらいの深いところがあった方がいいことや、畦際に生きものが多いこと、畦を利用して生きものが往来するなど、畦の重要性が判明したという話には納得した。

●たわわの小池　ザリガニ駆除

2011 年 12 月 15 日　参加者 7 人

11 月 23 日の池さらえ時に、余りにたくさんのアメリカザリガニがいたので取りきれず、後日有志でザリガニ退治をすることにした。10:00 からポンプで池の水抜きを開始し、水が抜けるまでの間にトンボの池に入れる落葉を袋詰めし、水生生物調査をし、前回刈った草や木を燃やしたりした。昼食後の 13:00～15:00 には、カワムツを捉えて川に放し、ザリガニを 742 匹捕まえた。池の中の植物としては、イグサ・ハナビゼキショウ・アブラガヤ・カンガレイ・ガマを確認したが、やはりハスは見当たらなかった。

●自然生態園作業

2011 年 12 月 17 日　参加者 15 人

午前中は、15 分間の生きもの調査をいつも通り行った。バッタの原っぱでは刈り払い機による草刈り、海辺の植物ブロックでは草抜き、その後自然遊学館の温室内も片付けた。

●東北震災被災地復興支援連凧づくり

2011 年 12 月 17 日　参加者 21 人

午後は、岩手県大槌町で 1 月に東北震災被災地復興支援の連凧を揚げる計画を応援するため、連凧製作をした。凧を製作する班と、でき上がった凧に絵を描く班に分かれて作業し始めてまもなく、実際に大槌町で連凧を揚げる小川信夫さんが来られ、凧作りを指導してもらった。日高佐知枝さんが、「絆、みんなつながっているよ」を一文字ずつ凧に描いくださる横で、子どもたちも個性溢れる絵を書いた。産経新聞の藤浦さんの取材を受け、12 月 28 日の産経新聞に掲載された。

貝塚のグループ制作、岩手・大槌で来月7日

絆の連凧 大空へ

東日本大震災による大津波で壊滅的な被害を受けた岩手県大槌町で、100連凧(れんだこ)を揚げて被災者を励ますと、大阪府貝塚市立自然遊学館が運営する自然観察グループ「わくわくクラブ」の会員らが連凧づくりに励んでいる。6月に現地で揚げたところ好評で、同町のボランティアグループから12月に依頼があり、新しい連凧2本の制作に着手。「絆 みんなつながってるよ」とのメッセージをはじめ、大阪から大槌への思いを込めた連凧は1月7日、大空を舞う予定だ。

わくわくクラブには、府内の親子連れら約70人が参加。5月に連凧を制作し、大阪府高槻市で行われたイベント「高槻ジャズストリート」で、会場近くの川の橋から揚げて披露した。その際、遊学館研究員の白木江都子さんが、ボランティアで大槌町へ入っている知人で「パレスチナ子どものキャンペーン」（本部・東京）の小川信夫さんに、「被災地で揚げたい」と持ちかけたところ、6月に大槌町での凧揚げが実現した。

2011.12.28 産経新聞

白木さんらによると、当初は地元から「めでたい凧揚げなどおかしい」といった反発の声もあったが、慰霊祭の翌日に揚げると、「一歩ずつ希望を持って」という連凧に託したメッセージが共感を呼び、今回の要請につながったという。

新年は、町内に完成した仮設商店街の祝福をかねて実施。クラブの子供たちが1枚1枚に思いを込めて描いた絵や文字入りの凧に、大槌町の子供らが描いた40枚の凧も連ねて100連凧2本をつくり、正月明けに大阪から運搬する。当日は、小川さんらの指導で、6月に大槌町の空を舞った凧とともに、地元の子供らに揚げてもらうことにしている。

白木さんは「メッセージが込められた凧が揚がる様子は本当に印象的。3つの凧で大槌の人たちを元気づけたい」と話している。

岩手県大槌町で揚げる連凧を制作するわくわくクラブのメンバー＝大阪府貝塚市の自然遊学館（藤浦淳撮影）

●アメリカザリガニ　レンコン摂食実験　Ⅰ

2011 年 12 月 21 日　岩崎拓（自然遊学館）

アメリカザリガニはレンコンを食べるか？

自然遊学館で飼育している馬場たわわ産アメリカザリガニ（赤い大型個体）にレンコンを与えると、普段の食事（エフクレタヌキモ、ザリガニ死体、魚死体など）からの予想を上回るスピードで食べ尽くした。昨年に小さいながらも収穫できたレンコンが今年はまったく収穫できなかったこと、および夏に五藤先生から「ハスがない」と言われたこと等を考え合わせると、昨年に採り残した根の部分がアメリカザリガニに食べ尽くされて、茎と葉が成長しなかったのではないかと推測される。

●アメリカザリガニ　レンコン摂食実験　Ⅱ
2011 年 12 月 24 日　岩崎拓（自然遊学館）

アメリカザリガニがレンコンを食べる速さを調べた。
体長 8 ㎝以上の赤い成熟個体を用いて 6 時間（10：00～16：00）実験を行った（普段はエフクレタヌキモを与えている）。

・12 個体に 22ｇのレンコンを 2 つに割って入れた
　研究室　円筒形の白色バケツ（内径 28.5cm）　14.7℃
　22ｇ→ 6ｇ
　1 個体当たり 0.2ｇ／時間
・10 個体に 22ｇのレンコンを 2 つに割って入れた
　展示室　緑色の舟（約 33cm×約 52cm）　16.1℃
　22ｇ→ 7ｇ
　1 個体当たり 0.3ｇ／時間
・19 個体に 24ｇのレンコンを 2 つに割って入れた
　倉庫　直方体の透明プラスチック水槽（28cm×43.5cm）　15.2℃
　24ｇ→ 6ｇ
　1 個体当たり 0.2ｇ／時間

【その他の記録】
1 個体が 6 時間、レンコンを占有することはなかった。
レンコンの塊が 6 時間で完全になくなることはなかった。
観察者が近づくとレンコンを抱えたまま後ずさりした個体がいた。

●自然生態園作業
2012 年 1 月 14 日　参加者 10 人

定例の 15 分間生きもの調査を行い、その後たわわの小池周辺から拾い集めた落ち葉を池の中に入れた。トンボの小橋を組んでいる丸太がはずれかけていたので、鎹（かすがい）を購入して固定した。

●自然生態園作業　樹木調査
2012 年 2 月 11 日　参加者 10 人

定例の 15 分生きもの調査を実施し、作業に目途が付いた時点で、ドングリの森の樹木調査を始めた。枝張りを計るのが大変だった。小池の掘り起こしをしたが、根が多く張っていてシャベルが入らず苦労した。暖かい陽射しの中での作業だった。

●自然生態園作業
2012 年 3 月 10 日　参加者 12 人

トンボの池の生きもの調べ 15 分間を実施後、海辺の植物ブロックの草抜きをした。昼食後はシンポジウム「生物多様性なら田んぼ」の打ち合わせをした。

●シンポジウムスタッフ打ち合わせ
2012 年 3 月 16 日　参加者 6 人

19:00～白木宅で、翌日ほの字の里で実施されるシンポジウム「生物多様性なら田んぼ」のスタッフ打ち合わせを行った。

●自然遊学館わくわくクラブシンポジウム「生物多様性なら田んぼ」
2012年３月17日（土）13:30～18:30 ／ ほの字の里研修室　〒597-0111 貝塚市蕎原2114

［開催目的］生きものと共存できる田んぼは里山自然の原点。農と自然を学び、活動に活かそうと企画。

［スケジュール］
11:30～　スタッフ集合・準備・昼食
12:00～　講師南海電車貝塚駅迎え　白木 茂・岡田恵司
「カエルの郷」現地案内
昼食は、ほの字の里食堂で
ゲストとスタッフの顔合わせと打ち合わせ

13:30～　**シンポジウム開会**　（総合司会：日高佐知枝）
・開会挨拶：山口 進(自然遊学館わくわくクラブ会長)
：高橋寛幸（自然遊学館館長）
・自然遊学館わくわくクラブ紹介：岡田尚子
14:00～　**基調講演**　「生物多様性なら田んぼ」
宇根 豊（百姓・NPO法人農と自然の研究所元代表）福岡県糸島市在住
15:40～　**休憩**
15:50～　**パネルディスカッション**「この頃の田んぼと山」
コーディネーター：福廣勝介（近畿水の塾代表理事・住宅管理協会関西支部）
事例発表：安田博之（近畿水の塾理事・あまがさきエコポリス研究会・農家跡継・尼崎市環境政策課長）
髙畑 正（農都ネット・森の小学校・森の学校・田んぼの学校）
パネラー：宇根 豊・安田博之・髙畑 正・喜多理恵・城野美姫子
17:20～　**休憩**
17:30～　**つぶやきトーク**　コーディネーター：白木 茂
18:30～　・閉会挨拶：保田淑郎（自然遊学館わくわくクラブ顧問）　**シンポジウム閉会**

・参加者：49人
・参加費：大人¥500（資料代+飲み物）・子ども¥200
・休　憩：お茶とラスク
・ポスターセッション：森本静子
・書籍販売：宇根 豊、宇根きみよ

・交流会　19:00～21:00
進行：佐藤拓二・白木江都子
参加者：大人30人　子ども8人
参加費：大人¥1,500　子ども¥500
わくわくクラブジュニアによる活動発表後と飲食しながら参加者紹介
・宿泊所集いの館で有志による二次会開催

■シンポジウム「生物多様性なら田んぼ」

・とき：２０１２年3月１７日（土）１３：３０～１８：３０

・場所：「ほの字の里」研修室

基調講演　「生物多様性なら田んぼ」

宇根　豊さん（百姓・ＮＰＯ法人農と自然の研究所　元代表）

パネルディスカッション　「この頃の田んぼと山」

宇根　豊さん

福廣勝介さん（ＮＰＯ近畿水の塾代表）

安田博之さん（あまがさきエコポリス研究会・農家跡継）

つぶやきタイム

・シンポジウム参加費（資料＋缶コーヒー）：大人￥５００・子ども¥200

・交流会：「ほの字の里」研修室　19:00～21:00（大人¥1500・子ども¥500）

「ほの字の里」
（貝塚市蕎原 2114　Tel.072-478-8777）
〈 www.honojinosato.com/ 〉

水間鉄道貝塚駅（南海本線貝塚駅）→水間駅→水鉄バス水間駅→蕎原口（そぶら）
（貝塚駅発　9:50　10:55　12:55　15:16
で水鉄バスに連絡）

シンポジウム・交流会参加者は、
終了時に、水間駅までお送りします

■参加申し込み：2012 年3月5日（月）〆切・「生物多様性なら田んぼ」シンポジウム事務局

E-mail：es-shiraki@iris.eonet.ne.jp　または　Fax. 072-424-4611　まで

お名前	所属	
連絡先（メール or 電話）	シンポジウム参加　大人（　　）人・子ども（　　）人	
	交流会参加　大人（　　）人・子ども（　　）人	

この活動は、平成 23 年度財団法人国際花と緑の博覧会記念協会と、2011 年度一般財団法人セブン-イレブン記念財団の公募助成を受けています

宇根豊さんの講演「生物多様性なら田んぼ」記録概要（岩崎 拓記）

・農業が景観をつくっている

中規模攪乱によって自然が安定する
産業や経済の側面だけから捉えてはいけない
社会全体から経済的な支援が必要
（私）日本人が美しいと感じる景観には共通点があって、遺伝的な基盤さえあるのではないかと思うが、もし文化的な基盤しかないのなら、自分たちの時代で断絶してしまうのかもしれない。

・生物多様性が土台ではない

生物多様性という考えは、全体的・総合的な思考に至る足がかりにはなるだろう
生物多様性の土台は、それぞれの人のいろいろな生きものに囲まれているという感覚であり、生物多様性という考え方がすべての土台になっているわけではない
生きとし生けるもの、一寸の虫にも五分の魂、というような伝統が日本にある
生態系サービスまで行くと、人間中心主義になりすぎ
生物多様性という言葉がない時代の百姓の方が、今の百姓より生きものの名前を知っていた
（めちゃくちゃ詳しく名前を知る必要はない）← 同意見

・人の頭の中にある自然が大切

人が感知できない自然よりも身近な自然が大切である
（私）自分もそう思うが、例えば、夕焼けの話にしても、それも人間中心主義ではないのか、生態系サービスは、さすがにどう見ても人間中心主義だが、それとどう違うのだろうか、これは自分に対しての質問。

・細かな話

自分自身がぼんやりと「使いたくない」と感じていた言葉に対して、なぜ「使わない方がよいのか」、宇野さんはしっかりとした考えを持っていることが多いと感じた。総合的にものをとらえて語るには、分析的にものごとを考えないといけないのだと改めて思う。

・自然という言葉について

自然環境　　Nature という語を翻訳するにあたって作り出した。
　　Nature　は、「天地」と訳すべきであったかもしれない。
自然にそうなる・・・日本には元々こちらの用法でしか使われなかった。

Nature は、神－人間－その他の自然が明確に分けられた西洋の自然
日本では、人は元々自然の一員であって、自然とか自然環境という言葉は存在しなかった
それは池の中のフナの例で示されたように、池の中のフナは池の形を知らないのと同じである

・科学について

池の中から釣り上げられたフナの例は、自然を客観的に外から見る西洋や科学の視点を示している
それは強い力を持っている
（私）宇根さん自身、物ごとを外部から客観的に見ていると思う
（私）個人の頭の中にある対象を、万人が認めうるものとなるように練り上げていくものだから（普遍性を獲得したものだから）、強力であるのは当然であると思う。一般性があり様々な個々の事象に対応できる。
（私）科学の中でも、分析と総合の間で揺れ動きがあり、分析的な科学だけではないと思う。
（私）すべての科学者が有用性を追求している訳ではないと思う。

・害虫、益虫、タダの虫

（私）生態系サービスという言葉も嫌いで、そのスカスカの中身を勉強する気もないが、害虫・益虫・タダの虫という言葉も同様に嫌いである。おそらく自分から積極的に発することはないだろう。害虫・益虫・タダの虫の話の際に感じたことは、先に書いた伝える力に関して、経験から来る説得力が断然違うのだと思う。何の専門家になれなかった自分には、芯になるものが無いのだろう。

宇根豊さんの講演「生物多様性なら田んぼ」で感じたこと（岩崎 拓）

多くの点で、というかほとんどの点で、宇根さんと同意見なので、質問することがなかった位である。客観的・分析的にものを見ることと、総合的にものを見ることとの間を、たえず行ったり来たりしている方だと思う。世の中にはそのどちらもしない人もいれば、どちらか一辺倒な人もいるが、そうではない宇根さんに、これほど同じ考え方の人がいるのかと共感するところが大であった。視点の自由自在さという点では、自分の方が硬化しがちだとは思う。自分がふだん人の話を聞きたくないと言っているのは、自分の中の批判精神が呼び覚まされるのがイヤだからということを思い出した。

農業の経験がない自分が、宇根さんとほとんど同じ考え、考え方に至っているのは、自然遊学館で多くの生きものと接していることもあるし、わくわくクラブで自然再生や援農に関わっていることもあると思う。自然遊学館の中でもイヤな仕事もあるが、没入できる仕事は多々あり、児嶋農園での作業でもそれは同じである。そういう意味で、自分が今置かれている立場がよく理解できたと思う。「百姓が多くの動植物に囲まれながら、作業に没頭している」という言葉は、わくわくクラブで児嶋農園に通っていなければ、頭でしか理解しないことになっていたと思う。

自分が科学べったりにならなかった原因は、才能は別にして、他の研究者（他人）の頭の中に興味がないこと、幼少時の昆虫採集からスタートして研究対象を単なる対象としては見ることができないこと、あるいはわくわくクラブでのふだんの活動があるかもしれない。ただ、宇根さんの話を聞いて思い直したことは、分析的にものを見ることと総合的にものを見ることの中間点近くばかりに安住していてはいけないということで、もっと振れ幅を大きくしていかなければ、とても追いつかないということである。追いつかなければならないということもないのだが、勝手ながら親近感を持ってしまったので。それにしても、伝える力には彼我の差があるなと思う。

●里山再生　河合町フィールド「カエルの郷」

場所：岸和田市河合町
日時：原則として第４日曜日　10:00～15:00

・2011 年４月 17 日　参加者 15 人

午前中は、上段の測量と上段下段の高低差の測量、池を広げるための試掘とメダケの根の伐根。子どもたちは川で魚・ヤゴ・サワガニなどを捕まえ、生きもの探しを楽しむ。ワラビ採りも盛り上がる。

・2011 年５月 22 日　参加者 15 人

降水確率 90%でも行事決行、土砂降りの中で講師の西澤真樹子さんを囲んで集合し、全員合羽を着込み、カエルを求めてフィールド周辺をウロウロ歩きまわる。ニホンアマガエル・シュレーゲルアオガエル・トノサマガエル・タゴガエル（亜成体）を確認。北川さんと白木茂は、トイレ施設工事のために、カエル探検隊に負けないぐらいびしょ濡れ。

・2011 年５月 28 日　参加者４人

朝 8 時から、近隣の農家の人たちと一緒に年 1 回の草刈りと水路掃除。

・2011 年６月 21 日　参加者２人

カエルの声録音器を倉庫の屋根付近に設置した。

・2011 年６月 26 日　参加者８人

「にごり池」から採集したガマが元池に根付く。元池には山や下の池から、たくさんの生きものがやって来る。イモリは成体も幼生もいて、幼生を見つけた時はサンショウウオかと思ってドキッと。オオシオカラトンボが交尾や産卵をし、ヤマサナエも飛んできた。採集したトンボで不明のものは、後で岩崎拓さんからハラビロトンボと教えてもらう。凄く暑くて、水分補給が大変。

・2011 年７月 24 日　参加者 11 人

切り倒したメダケはいまだに野積みになっているので、毎回燃やす必要があり、安全に燃やすための穴を掘っている。
立派なトイレがとうとう完成。先月に植えたジャガイモが芽を出す。

・2011 年８月28 日　参加者５人

雑草の勢いがすごい。草刈りとメダケ燃やしに追われる。

・2011 年９月25 日　参加者 17 人

奥田大介君が参加すると、カナヘビ・シマヘビ・ヒバカリが一瞬にして捕らえられたので、子どもたちは大介君が英雄に見えるようだ。
メダケを燃やしたり、草刈りは手刈りだけではなく、女性陣も機械刈りに挑戦。農作業用にメダケを切りそろえ、各自の畑へ持ち帰る。

・2011 年 10 月６日　参加者５人

上段には、朽ちてきたメダケの山がいくつかあり、全て燃やしてしまいたいという意気込みで取りかかる。北川さんが刈り払い機で、メダケを短くして下さったので運び出しやすくなり、タケの節の破裂音に驚いたり快感を覚えたりしながら頑張るが、もう半日分ぐらい残ってしまう。森本さんの生きもの調査は、前回 9 月 25 日の調査を補うものだそうだが、前回見られたものが今回は全くいなかったらしく、生きものは実に短い間に変化するものだと、今さらながら感心しきり。

・2011 年 10 月 10 日　参加者６人

前回燃やし残したメダケを、今日こそ全て燃やしてしまおうと、みんな本気だったが、今回も予想以上の量で、昼食を遅めにしてやっと燃やし尽くした。達成感を味わいながら昼食を食べた。参加者はススと泥だらけ、このような肉体労働がどうして楽しいのか不思議。

・2011 年 10 月 23 日　参加者９人

駐車場への進入路を建設。北川さんと白木茂が、丸鋼管と万能板で土留めをし、女性陣は道路脇に溜まった土を一輪車で運び、盛り土をした。午後から力持ちの堀さんが加わって工事はスピードアップ、幅約 4m の進入路入口が完成。これで、11 月末にはバックホウがフィールドに入れるだろう。セブンイレブンの助成金で買ったホンダ発電機は騒音が少なく、威力もあり大活躍。

・2011 年 11 月 24 日～25 日　バックホウ、メダケ抜根作業委託

セブンイレブンみどりの基金で、泉佐野市公園緑化協会にバックホウによるメダケ伐根と整地作業を委託。進入路の造成が十分ではなかったので、バックホウが入りづらかったようだが、上段下段とも整地が進み、いよいよ田畑ができそうだ。

・2011 年 11 月 27 日　参加者８人

泉佐野市公園緑化協会のご好意で、バックホウを延長してお借りすることができ、重機免許を持つ会員の北川敏喜さんが、未だ残っているメダケの伐根や、新たな池つくり、池から池への水路を掘ったりと大活躍。

・2011 年 12 月 18 日　参加者７人

進入路整備のために、前回重機で掘った池と水路の残土を一輪車で運び、整地し、トンボの池づくりに使ったタコで土を固めた。
下段でも、土地を開墾する度にメダケの根が出てきて、掘り上げて焼却するのに時間を費やす。

・2012 年１月 28 日　参加者６人

主に上段で、今回もメダケの根の土を払い落としながら焼却する。カキノキに絡みついたクズを切り取り、周りのメダケを伐って木に日が当たるようにした。

・2012 年２月 26 日　参加者９人

北川さんが古材を使って長椅子付きテーブルを製作、作りたてのテーブルに座って昼食を食べた。積み上げてあったメダケの根は雨に濡れて燃えにくかったので、スギの落葉を拾い集めて勢いを付け、石井千佳さんが、その火でマシュマロを焼き、クラッカーに挟んでみんなに振る舞ってくれる。
イノシシが暴れているようで、水路に土や落ち葉が溜まり、池に水が流入しなくなったと、隣の「そよも」さんに訴えると、鍬を持って見に行ってくださり、一緒に泥上げ作業をした。

・2012 年３月３日～5 日　参加者３人

前作業日の 2 月 26 日、「そよも」さんと水路掃除をしたので、帰り間際には大量の水が元池に入り込むようになっていた。その後大雨の日が何日もあったので、池は満水を通り越して被害が出ているのではないかと気にかかり、北川さんと白木 2 人とで出向く。道路にも大量の水が流れた後がくっきり残っていたし、水路の土管が歪んでいたりしたので、掃除など修復作業は多岐にわたった。翌 4 日、3 人で様子を見に訪れた日の早朝に、そよもさんが地主さん宅へ、「大量の水が畑や農機具小屋に流れ込んだ」と大変な剣幕で駆けつけた、と連絡をもらったので、白木茂が河合町へ急行し、運良く現場でそよもさんに会いお詫びをした。台風の時、田畑を見回りに行って命を亡くすお百姓さんの気持ちがよく理解できる。

・３月25日　参加者６人

上段の池と水路のレベル測量をし、南池から北池にスムーズに水が流れるよう水勾配がとれているかどうか検証した。また進入路の鉄の塀が無粋なので、イタビカズラを植え、いつものようにメダケの根を焼却し、その近くに畑を作ってジャガイモ植え付けた。全員で下段の田んぼを拡げた。未だにカエルの卵塊を発見できないでいるし、今年もアカガエルは産卵には来なかったようだけれど、5 月～6 月のトノサマガエルに期待したい。

●ハッサク山援農作業

場所：紀ノ川市桃山町黒川　児嶋果樹園（通称向山）
日時：原則として第１火曜日　9:30～17:00

・2011 年４月５日　参加者８人

ハッサクの剪定と東北震災被災地へ送るためにハッサク詰め替え

・2011 年４月 12 日　参加者２人

ハッサクを宅急便で、岩手県大槌町へ送る

・2011 年５月 18 日　参加者４人

草刈りとイノシシ防護柵の修理

・2011 年６月 14 日　参加者５人

草刈り

・2011 年６月 24 日　参加者４人

山荘の果樹園でリンゴの袋掛け

・2011 年７月 12 日　参加者４人

向山草刈りと山荘の倉庫掃除、ハッサクの実膨らむ。

・2011 年９月６日　参加者６人

向山でハッサクの摘果と草刈りもしながらカボチャの収穫と草刈り。山荘でクリ収穫

・2011 年 11 月１日　参加者５人

渋ガキ収穫後、川沿いの別土地見学と整地

・2011 年 12 月６日　参加者５人

・2011 年 12 月 20 日　参加者５人

ハッサクの収穫と道普請
今年のハッサクは、実が大きく手のひらに入り切らないほど

・2011 年 12 月 23 日　参加者 24 人

ハッサクの収穫
今年は、4 グループにわかれて、ハッサクの木を 1 本ずつ収穫し終えていくことにした。各班毎に、木に登って収穫する人、下で受け取る人などと分担したので作業がはかどり、また自分の得意な作業をすればいいので、楽だったようだ。午前中に下の段の大部分を収穫し、午後からは下の段の残りと上段に取りかかったが、今回も穫り残したハッサクがかなりあった。

・2011 年 12 月 25 日　参加者７人

残りのハッサクをほぼ収穫し終える

・2012 年１月５日　参加者５人

竹林の整理

・2012 年１月 26 日　参加者５人

山に向かう途中から降り始めた雪は作業中に止むが、うっすらと積もる。前回に続き竹林整理とハッサクの袋詰め作業

・2012 年２月 14 日　参加者５人

ハッサクをコンテナと袋に詰める

・2012 年２月 16 日　参加者４人

販売用ハッサクの袋詰めと剪定作業

・2012 年３月１日　参加者６人

向山で販売用ハッサクを袋詰めし、午後からは山荘で選果

・2012 年３月６日　参加者５人

出荷手伝い

・2012 年３月 11 日　参加者３人

山荘のハッサクを剪定

・2012 年３月 21 日　参加者４人

ハッサクの剪定と剪定枝焼却、並行して竹林整理

●近木川定点観測

大阪府二色の浜公園・脇浜潮騒橋から上流部（山側）と下流部（海側河口干潟）の定期的写真撮影

・2011 年４月：白木　茂

・2011 年６月：鈴子佐幸

・2011 年８月：日高佐知枝

・2011 年 10 月：湯浅幸子

・2011 年 12 月：江本玲子

・2012 年２月：岡田尚子